

たてざと(二) 二六五

たてごと

- 1912年 埼玉県に生まれる
本名 福次郎
- 1930年 啓示をうける
- 1933年 神道家 関口才助・モトの
養子となる
- 1947年 たてごと創刊 現在(100)号
- 1978年 たてごと合本第四巻発行
- 1978年 第三巻発行

たてごと（合本）第二巻

1979年4月15日 発行

著 者 関 口 大 雅

編集発行人 全

発行所 琴 鳴 社

350-02 埼玉県坂戸市浅羽1494

電話番号 0492-81-0986

振替口座番号・東京5-47196 琴鳴社

七曜印刷出版 野田製本

(頒価1,000円 送料160円)

たてごと（合本）第二巻 目次

(28)号・人間の真のよろこびとなるところのものが人間の富である 高井夫人に与う あとがき	1
(27)号・ほのぼのとしたぬくみと高い香気が 坂戸中学の卒業生に与う 朝 夜	2 8 9 10 15 16 17
(26)号・かつてローマ法王は天国行の切符を売ったというが 人生讃歌 あとがき	18 17 16
(25)号・ソロバンからは生命はうまれない 田園生活 あとがき	24 25 26 32
(24)号・この書を青年諸君に贈る 一度や二度女とかけおちぐらいしたって悪いことはないよ 百姓の歌 いも掘り	33 34 40 41
(23)号・食べれば腹をとって廁へおちる米のようなものでさえ	41

妻と語る	42
高井夫人を訪う	46
下地恵常氏をむかえて	47
リヨウ (1948. 11. 15 ~ 1949. 8. 2) の墓	48
63号・ぼくは公式の学校へあまりいってこないのです	49
新しき倫理	50
詩人大雅氏を聘して旧約聖書をきく、そのまどるによめるうた	56
柳瀬博親	56
あとがき	56
63号・コスモスの花さく庭にむしろしきのべ	57
ダビデの歌	58
同人抄 (野川幸一・栗原武夫・吉田花子・利根川力・細野軍治・柳瀬博親)	64
64号・ジョヴァンニ・パビーニの言葉	65
ベツレヘムの星	66
秋思	71
下地恵常	71
あとがき (詠草五首・外)	72
65号・君らの眼は一向に外にばかり向いていて	73
(悲願・コウモリ直しの歌)	73
66号・神と語るたましいよ	77
方舟	78
お便り (あとがき)	84
利根川 力	84

87号・私には人間が進化してきたという説が信じられません

王子の生誕

月の夜の散歩

敬愛する琴鳴社詩人関口氏に誌材を贈りて「たてごと」に寄す

潤達な性情と豪放な笑いの中に

88号・わたしは石を投じている

あたらしきもの

浅羽野（三首）

いのち

いちはずの花

あとがき（川崎まさし君に寄す）

89号・真昼なか きつねとたぬきが背広きて

あすをになうもの

城の腰田（十四首）

苗木

私のよろこび

私のねがい

40号・事実は事実である 何ものもこれを変えることはできない

ダビデ（DAVID）註

85

86

90

92

92

93

94

97

98

99

100

101

102

104

106

107

108

109

110

いと子

鈴子（小学三年）の生花（二首）

朝

川崎まさし

会員紹介

(41)号・ 齢八十二　その肉体の火の　まさに消えさらんとする　死の数日まえに

星座の下

いも掘り（八首）

永遠なるもの

岩崎信行

あとがき（新会員紹介）

(42)号・ あなたのところがしずかに^な屈いで

ダニエル（DANIEL）

あとがき

会員紹介

(43)号・ ハバタカないから空洞ができる

自己との対面

悲歌

やまびこ（お便りの中から）村本達郎氏・西沢金作氏・藍川重次郎氏・栗原武夫氏

会員紹介

(44)号・ とよはたぐもあやなしわたるあめつちの

タやけ	142
カンバツ	143
羞恥	146
あとがき	148
(49号) 朱にまじわればあかくなるといわれるが	149
悲歌(一)	150
あとがき	156
(49号) 魂を抱擁しかれにクチツケせよ	157
農人のうた	158
小品集(一)	160
あとがき	164
(49号) 浅羽野の田人われあめつちに太祝詞言宣る ふたのりことこの	165
天の防人 あまのりもり	166
草笛	167
あとがき	172
(49号) うまれが白鳥の玉子であってみれば(アンデルセン・みにくいアヒルの子より)	173
皇太子に贈る詩	174
(49号) わたしは本当に生きたいんだ	181
一本の葦	182

日出子（長女）への手紙	190
あとがき	192
60号・憲法記念号・真実を愛する魂よ	193
日本国憲法（ばっすい）	194
憲法の防衛	195
あとがき	200
51号・私はひとえにたましいの名誉を高めたいとねがうがゆえに	201
不夜城	202
モロコシ掲き	208
たてごと（合本）第二巻編集あとがき	209

1949 (S. 24) 2月

人間の真実のよろこびとなるところのものが
人間の富である

地上の財産はきわめて一少部分の外部的な形象にすぎない
然るに地上の財産をもつて

人間の全般的な富であるとする資本主義の経済理念も
これが肯定の上に立つ共産主義も

ともに富の本質にふれていない
富の固形化は富の偶像化であり

それは富の埋葬である

人間は誰でもみずからの内裡にかぎらない宝蔵をもっているものであ
るといふ啓示が

人類にあたらしい生活の希望を与えるであろう

た
て
ご
と

(26)

高井夫人に与う

ぼくはあなたが真実を求めていなさる方であることを知りました
あなたと語っていると、いつまでもあかないよろこびがわいてきます
ことに印象ふかいのは

一夜 お世話になった翌朝

高井氏が勤めに出てゆかれたあと

朝日のさしこむ 二階の奥の間で

あなたが下からもってこられた

いくさつかの世界名画集を

二人で見ていた あのおちついたたのしい雰囲気であります

わたしは人など語りたいとはおもいませんの

じっと一人で考えていたい

わたしはひねくれているのでしょいかね

夫人よ

あなたは真実を求めていなさるのだ

あなたはすなおなお方なのです

あなたが世の中と和解出来ないのは

世の中がくもりけがれて

虚偽と罪惡にみちているからですよ

ぼくはあなたのひとみがひかるのを見ました

夫人よ

つよく生きなさい

あなたはもっと勇敢に

おのれのみちにすすまなければいけません

あなたはあなたが信ずるみちにすすむのに

ためらわなければならぬものが存在するなどと思つてはいけぬ

おのれ以外のものに^{キョクセキ}躊躇しつゝ

生活に主体性をもたないのは

信仰のない異邦人の世界です

よまことに　かの異邦の教義が

多くの悲劇を生んでいるのだ

自己ギセイを説く東洋の倫理は

まだ　ザインの世界を彷徨しているものである

かの

人間以前の教説が

長年月

人間を封建性の牢獄へ幽閉してきた

人間の人間たる所以は

そのゾルレンによってザインを征服するにある

ぼくはかつて戦争中

B 29 の来襲のたびに

その背後に天使の臨在をみとめて歓呼し

この信仰なき偶像のくにを焼き払えとさげんだ

そのはげしい声が

ヒマラヤの雪山にこだましたのか

ときじく深夜の耳朶をうつ

夫人よ あなたがためらうべきものは何もない

あるなどとおもんばかるのは

虚妄であり 罪悪であり 姦淫である

あなたは あなたの日頃尊敬している詩人の来訪をうけて

こうしていま親しく語っているのは本当に幸福ですとおっしゃいましたね

しかしながら 見よ

与えられたものは自分のものとはならない

自分がたたかって かちえたもののみが真乎おのが富となるのだ

そうだ

あなたはのことをよく知らねばならぬ

そしてあなたが尊敬しているという詩人の

その内的富は

彼のいかなる生活によってぎずかれているものであるかを

しずかにお考えなさるがよい

天候がよくて米が沢山とれたとて

それが 人間の幸福と直接かかわりのあるものではない

また今年のように冬があなたかくて麦が徒長し

減収が予想されるからといって

人間がそれによって不幸になるものでもない

人間の幸福は 人間以外のものによって支配されるものではないのだ

食物が不足すれば

不足しなければ知られないであろうところのより深い真実の世界をもし知りえよう

そしてより高い秩序の形成に貴重なヒントをもつかみえようではないか

まことに食糧の不足など 物の数でない

むしろ憂うらべるべきは

食糧の不足が人間を不幸にするという

人間自身の誤謬であり 浅慮であり 錯覚である
そして更に浩嘆せらるべきは

人間の

人間自身に対する信頼の喪失であらう

かつてアメリカは奴隷解放のために

その国運を賭して戦ったが

人間不信の内的桎梏から

人類全般を解放すべき いくさのラッパは

いまもなお

颯々と

詩人の胸をうちつづけている

ああ 夫人よ

いさぎよくおなりなさい

人間がその精神を自由に羽ばたかす

あたらしい太陽がのぼったのですよ

顧慮をすてなさい

そして

あなたを燃やすところの火と

秘密の室で語りなさい

確信は神との契合からのみ生まれるであろう

ああ あなたとしみじみと語った

二階の朝

ミケランジェロや ラファエロの絵を見ながら
語った朝の

あの おちついた清い靈気が流れてくる

あとがき

もうここ十日あまり桂木山（西方約二里）へたきぎとりに通う。

竹内さんが自転車の後へ綱をつけて、リヤカーをつけたぼくの自転車をひっぱって往復する。谷川で水をくみ、火を焚いて茶をわかしながら、ノコギリの目立てをし、いもなど焼いて食べたりする。今日は町で塩タラを買っていつて昼食に焼いて食べた。

ぼくが木にはしごをかけて高くのぼって枝を切りおろす、竹内さんがショイバシゴで三、四束づつ車のつくところまで脊負いおろす。リヨウ（銅犬）がついてきて一日中あそんでいる。

こうした新で焚くところ飯にもいのちがはいるでしょうね。

エエ、本当に、何でもやって見なくてはものはわかりませんね。

時折、四十カラの群が飛んできて枝から枝へわたってゆく。娑婆の風の吹かない山へ入って働いていると清純なよろこびが湧いてきて魂を洗う。

妻はこのごろ「ヴァン・ゴッホの生涯」を読んでいるが、彼女は心境とみにすすみ颯爽としてきた。

一緒になってからもう十四、五年にもなるが

何だが最近結婚したばかりの

新妻のような感じがする。

1949 (S. 24) 2. 20 印刷
1949. 2. 25 発行
著作兼編集・発行人 関口大雅
発行所 琴鳴社
埼玉県入間郡坂戸町浅羽 1494
たてごと読者会規約
会費 1ヶ年 120円送料共
(非売品)